

International University of Health and Welfare
「共に生きる社会」の実現をめざして

IUHW

2024.11.30発行

vol.139



2025年に
開学30周年を迎えます



赤坂 国際の集い ラオス料理の屋台にて

特集

赤坂 国際の集い

第14回国際医療福祉大学学会学術大会



医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。

国際医療福祉大学

東京赤坂キャンパスで開催

赤坂 国際の集い

アジアからの留学生をはじめ、本学の学生・職員によるさまざまなイベントを通じて、地域の方々と交流を深める「赤坂 国際の集い」が10月27日、東京赤坂キャンパスで開かれた。留学生による日本語スピーチコンテストをはじめ、各国の民族舞踊、ピアノコンサート、スペシャルゲストによるコンサート、和芸能、アジア各国料理の屋台など、盛りだくさんのプログラムに加え、今年は大学説明会や健康教室も同日開催。地元赤坂の行政・町内会関係者や留学生の出身国であるアジアの大使館関係者など、訪れた約750人が楽しいひと時を過ごした。



スピーチコンテストの参加者と審査員の先生方



挨拶する高木邦格理事長



澤和樹さん、蓼沼恵美子さんのデュオコンサート



ピアノコンサートで演奏する神尾美奈さん(医学部医学科)



地元赤坂氷川神社の山車保存会の皆さんが山車に乗ってお囃子を演奏

新たなプログラムが加わった今年の「赤坂 国際の集い」

今年の「赤坂 国際の集い」は、東京赤坂キャンパスの講堂・カフェテリア、3階の各教室、1階のフロアで開催された。

留学生による日本語スピーチコンテストで幕を開けた講堂でのプログラムは、昨年同様、赤津晴子副学長が日本語と英語で司会を務めた。スピーチコンテストには、医学や介護福祉、理学療法などを学ぶ大学生やグループ施設職員ら9か国10人が参加。「私と日本」をテーマに、日本で言葉、文化の壁にぶつかりながら、努力と周囲の支えによって成長していく様子がさまざまな視点で語られた。10人の発表が終わると、審査委員長の鈴木康裕学長から審査員の紹介があり、「留学生の皆さんのスピーチはどれも素晴らしく、受賞を決めるのが難しかった」と講評した。

審査の結果、金賞に輝いたのは、ミャンマーからの特定技能実習生・ソー サンダー

セイ ウィンさん(新宿けやき園)となった。介護の仕事に従事するソー サンダーセイ ウィンさんは、日本人スタッフ以上に自分をかわいがってくれた高齢の利用者の死に接し、悲しみを乗り越え、介護とは介護される側もする側も助け合って成り立っている仕事であるということに気づいたという内容のスピーチを披露した。スピーチの締めくくりに、介護福祉士の試験に合格するためにこれからも日本で福祉の仕事をしていくと語った。



●金賞のソー サンダー セイ ウィンさん

続く留学生パフォーマンスには、ベトナム、カンボジア、ラオス、ブータン、モンゴル、インドネシア、ミャンマーの7か国の留学生が参加。それぞれの国の名所などを映像や音楽で紹介しながら、民族衣装を身にまとった学生がグループで踊りや歌を披露し、会場を盛り上げた。その後、コンクール入賞経験のある本学医学部生4人によるピアノ演奏が行われ、その美しい音色が講堂の聴衆を魅了した。



●留学生パフォーマンス(ベトナム)

初の試みとして「大学説明会」「健康教室」も同日開催

「赤坂 国際の集い」との同日開催は今回が初となる「大学説明会」と「健康教室」が、いずれも午前11時より3階の教室で開催された。

「大学説明会」では冒頭、鈴木康裕学長が本学の特長と魅力についてスライドを用いて紹介した。本学が医師以外の医療福祉

の専門職のための四年制大学として誕生した経緯から、医療福祉のほぼすべて学びの領域をカバーしていることなど、本学の学びの環境について説明。さらに、来場者に向け「本学の医学部は1学年140人中20人が留学生で、多くの外国人が学ぶ国際的な環境です。本日同キャンパスの講堂では、留

学生たちの日本語スピーチコンテストやパフォーマンス、各国料理屋台を楽しめる『赤坂 国際の集い』を開催していますので、説明会後にぜひお立ち寄りください」と案内した。続いて、岡本秀彦医学科長による医学部入試説明会、その他の学部の入試説明や全学部の個別相談も行われた。

また、同じく11時から、3階の多目的ホールで開催した「健康教室」では、山王病院の藤田大司内科副部長が「心臓病いろいろ-このような症状にご注意-」をテーマに、国際医療福祉大学三田病院の秋田雅史心臓外科部長が「心臓外科最新治療 ダメージの少ない手術について」をテーマにそれぞれ講義を行った。



●大学説明会で本学の魅力を紹介する鈴木学長



●3階多目的ホールで行われた健康教室

今後も地域の恒例となるイベントに

カフェテリアでは正午以降、留学生によるアジア各国料理の屋台のほか、国際医療福祉大学三田病院、山王病院、新宿けやき園の職員による焼きそばや牛肉ワイン煮込みなどの屋台や血圧測定をする健康ブースが立ち並び、多くの来場者で賑わった。

また、1階では赤坂心理・医療福祉マネジメント学部の学生によるヨーヨー釣りや射的などのお祭り屋台が日本の縁日のにぎわいを演出し、訪れた子どもを中心に人気を集めた。

さらに講堂では夕刻より、スペシャルゲストパフォーマンスが行われ、ヴァイオリニストの澤和樹さんとピアニストの蓼沼恵美子さんによるデュオコンサート、琴・三弦・尺八・舞踊による日本の伝統芸能が披露された。スペシャルゲストパフォーマンス冒頭、高木邦格理事長が登場し、「この後、スベ

シャルゲストとして、東京藝術大学の学長を務められた澤先生と夫人の蓼沼恵美子さんが演奏していただきます。2026年4月、本学グループは福岡県唯一の四年制の福岡国際音楽大学を開学予定ですが、澤先生はその学長に就任していただくこととなりました。新しい音楽大学は、アジアを代表する音楽大学をめざしております」と紹介した。さらに「本日は本学に地域の皆様や大使館

の皆様をお迎えし、このように盛りだくさんな内容のイベントを開催することができました。今後も地域の名物となるようなイベントにしたいと考えておりますので、来年もどうぞご期待ください」と挨拶すると、観客からは大きな拍手が沸き起こった。

多くの来場者で賑わった「赤坂 国際の集い」は盛況のうちに幕を閉じた。



●ブータン料理の屋台



●馬頭琴を弾くナランバヤル アマルサナーさん(モンゴル:医学部医学科)



●和芸能の菊地佐代子さん(三弦)、城戸さくらさん(箏)、城戸尽山さん(尺八)、花柳 美世愛恵さん(踊り)

第14回 国際医療福祉大学学会学術大会

～本学ならではの研究の展開～

第14回国際医療福祉大学学会学術大会(大会長:坂元亨宇医学部長)が9月16日、成田キャンパスW棟9階国際会議室をメイン会場に開催された。成田での開催は昨年に次ぐ3回目。「本学ならではの研究の展開」をメインテーマに研究成果の報告、多職種連携をテーマにしたシンポジウムなど活発な議論が交わされた。

鈴木学長「研究開発に頑張れる余地ある」

開会にあたり、鈴木康裕学長(学会長)は来年、本学が開学30周年を迎えることを踏まえ、「教育、臨床、研究の3つの柱のうち、研究に関しては今後もう少し頑張れる余地がある」と指摘、今後の本学での研究分野の発展に期待感をにじませた。

坂元大会長は「多職種連携は本学の長所でもある。コロナ禍も明け、対面での交流が可能になった。口述発表、ポスター発表の場で多くの方々に発表していただき、『本学ならではの研究展開のきっかけを作りたい』と強調した。今回の大会では、一般演題に307演題のエントリーがあり、特に優れた優秀8演題が口述発表された。

午前の部では、優秀演題口述発表の後、「医薬品製剤設計への計算化学の応用と将来」と題して米持悦生成田薬学部長が講演、特別講演では小室一成副学長が「未来の医療—ビッグデータ解析、AI診断、ゲノム・オミックス研究について」をテーマに話した。



●開会のあいさつをする
鈴木学長(学会長)

●開会の辞を述べる
坂元医学部長(大会長)



●優秀発表者の表彰式後の記念撮影

将来構想勉強会 5グループが成果発表

午後一番で行われたのは、将来構想勉強会の成果報告。この勉強会は、2022年から鈴木学長主催で開かれており、発展し続ける本学の近未来の具体的な構想を各学科、各キャンパスから選出された教職員が、月1回、朝7時半から1時間ほどの勉強会を開いてきた。

今回は勉強会2期目で、①障害のある学生の支援強化、看護学共用試験導入、ペーパーレス化の推進②IUHW障害者雇用プロジェクト③大学業務のデジタル・トランスフォーメーション④本学卒業生の関連病院・施設の定着へ向けて⑤国際医療福祉大学をつなぐプラットフォーム構築—の5つのテーマ別に話し合った5グループの発表が行われた。

職種連携の研究の可能性を探る

最後に「多職種連携による研究の推進」というテーマでシンポジウムが行われた。医学部放射線医学教室の桐生茂教授(代表)は放射線医学、医学部リハビリテーション医学教室の角田亘教授(代表)はリハビリテーション医学、成田看護学部の井上智子学部長は看護学、赤坂心理・医療マネジメント学部の長谷川見准教授は心理学というそれぞれの分野から本学ならではの多職種連携の研究の可能性について発表があった。

SDGsアクションで 大田原キャンパスが学長賞

閉会式では各キャンパスが今年度取り組んできた「国際医療福祉大学SDGsアクション2024」で好成績を上げた大田原キャンパスに、ペーパーレス分野での貢献が評価され学長賞としてトイレトペーパー48ロールが贈られた。

最後に坂元大会長が「充実した一日だった。特に最後のシンポジウムのテーマは本学の基本理念、DNAともいうべきもので課題が見つかる一方、魅力のあるテーマであり、のびしろのあるものと改めて認識した」と締めくくった。

また、鈴木学長は午前の表彰式後、「学会学術大会に参加したのは4回目だが、最もレベルの高いもので、学内での共同研究の目があると思えるものだった。研究そのものの価値は高いが、評価されるのは社会に還元されてこそ。これを日々の研究に生かして欲しい」と激励した。



●大田原キャンパスにSDGsアクション学長賞を授与

学術大会プログラム内容

(プログラムより)

■優秀演題口述発表I

- 座長:成田保健医療学部 言語聴覚学科長 倉智 雅子
- 「パーキンソン病におけるドパミン欠乏と細胞内鉄蓄積の関係」
薬学部 薬学科 三浦 隆史
 - 「AFO基準に基づいた早期の治療介入は同種造血幹細胞移植後の閉塞性細気管支炎の発症予防に有効である」
国際医療福祉大学成田病院 血液内科 中世古 知昭
 - 「地域の健康危機に対応する保健師の実践力向上のためのケースメソッド教育の開発—本大学院公衆衛生看護学実践コースで実施している演習の学びの特徴—」
※オンラインでの発表
大学院医療福祉学研究所 保健医療学専攻 看護学分野 山谷 麻由美
 - 「糖尿病慢性合併症に対する理学療法の実態と介入効果の大規模レジストリー研究」
成田保健医療学部 理学療法学科 河野 健一

■優秀演題口述発表II

- 座長:成田保健医療学部 作業療法学科長 谷口 敬道
- 「静的立位時の下方への視線配置が姿勢安定化をもたらす要因についての検討」
保健医療学部 視機能療法学科 内川 義和
 - 「幼児期前期の子どもの行動に対する母親の認知スタイル形成—母親の被養育体験と内的作業モデル(IWM)との関連性に着目して—」
株式会社コベル 宮内 唯衣
 - 「高齢者における表情認知と認知機能の関連性:概念駆動型とデータ駆動型の比較研究」
福岡保健医療学部 作業療法学科 韓 侑熙
 - 「糖脂質リポソーム製剤の腹腔内投与による抗腫瘍効果の検証」
国際医療福祉大学成田病院 腎泌尿器外科 宮崎 淳

■教育講演

「医薬品製剤設計への計算化学の応用と将来」

演者:成田薬学部長 米持 悦生

座長:薬学部長 三浦 裕也

■特別講演

「未来の医療—ビッグデータ解析、AI診断、ゲノム・オミックス研究について」

演者:副学長 小室 一成

座長:副大学院長 伊豫 雅臣

■将来構想勉強会成果報告会

●グループ1「障害のある学生の支援強化、看護学共用試験導入、ペーパーレス化の推進」

●グループ2「IUHW障害者雇用プロジェクト」

●グループ3「大学業務のデジタル・トランスフォーメーション」

●グループ4「本学卒業生の関連病院・施設の定着へ向けて」

●グループ5「国際医療福祉大学をつなぐプラットフォーム構築」

司会:成田保健医療学部長、理学療法学科長 西田 裕介

■IUHW NEXT講演会

「地域包括ケアシステムにおける生成系AIによる医療介護連携」

演者:株式会社アルム 代表取締役社長兼Co-CEO

坂野 哲平

座長:学長 鈴木 康裕



●大会会場の様子

■シンポジウム

「多職種連携による研究の推進」

司会:副学長、保健医療学部長 新井田 孝裕

●「多職種連携による放射線医学研究について」

演者:国際医療福祉大学成田病院副院長、

医学部 放射線医学教室教授(代表) 桐生 茂

●「リハビリテーション医学研究における多職種連携—世界に誇れる本学の強み—」

演者:国際医療福祉大学成田病院 リハビリテーション科部長、
医学部リハビリテーション医学教室教授(代表) 角田 亘

●「多職種連携による学際的研究と看護の視座からの提案」

演者:成田看護学部長 井上 智子

●「心理学研究の立場から:研究室の活動を例に挙げて」

演者:赤坂心理・医療福祉マネジメント学部

心理学科准教授 長谷川 晃

■優秀演題表彰者

■学会長賞

国際医療福祉大学成田病院 腎泌尿器外科 宮崎 淳

■学術大会長賞

成田保健医療学部 理学療法学科 河野 健一

■優秀賞(口演)

薬学部 薬学科 三浦 隆史

保健医療学部 視機能療法学科 内川 義和

株式会社コベル 宮内 唯衣

福岡保健医療学部 作業療法学科 韓 侑熙

国際医療福祉大学成田病院 血液内科 中世古 知昭

大学院医療福祉学研究所 保健医療学専攻

看護学分野 山谷 麻由美

■優秀賞(ポスター)

保健医療学部 看護学科 秋葉 喜美子

国際医療福祉大学塩谷病院 整形外科 須田 康文

保健医療学部 作業療法学科 関森 英伸

保健医療学部 言語聴覚学科 前新 直志

福岡国際医療福祉大学医療学部 言語聴覚学科 福井 恵子

大学院医療福祉学研究所 保健医療学専攻

放射線・情報科学分野修士課程 近藤 大祐

福岡保健医療学部 医学検査学科 小荒田 秀一

福岡薬学部 薬学科 塚本 宏樹

薬学部 薬学科 浜田 俊幸

総合教育センター 永射 紀子

基礎医学研究センター 下重 里江

基礎医学研究センター 後藤(松元) 奈緒美

国際医療福祉大学三田病院

悪性リンパ腫・血液腫瘍センター 中崎 久美

国際医療福祉大学成田病院 消化器外科 篠田 昌宏

大学祭レポート

10月
12・13日

大田原キャンパス

第29回風花祭

「夢のひとつとき〜謳歌してもいいじゃない この時だけは〜」をテーマに第29回風花祭を開催した。日々多忙な生活を送る学生にとって、わずかでも夢のようなひとときを全力で楽しむという想いを込め、実行委員が中心となり地域の皆様をはじめすべての来場者を楽しんでいただけるような企画を考え、ほぼ1年がかりで準備をした。銀杏並木道は所狭

しと学生団体の模擬店が並び、食欲を誘う香りが広がるなか、数多くの来場者で賑わいを見せた。ステージでは、警察音楽隊や大田原市民吹奏楽団、黒羽太鼓保存会による演奏のほか、GTRやレクサスバトカー、自衛隊の特殊車両などの展示も行われ、風花祭が大いに盛り上がった。(学生課 菊地優太)



●風花祭を楽しむ学生ら



●警察音楽隊による演奏



●たくさんの模擬店が並ぶメイン通り



●盛り上がりを見せる野外ライブ

成田キャンパス

第9回成翔祭



●18の団体が出展した模擬店



●昨年を上回る数の来場者が訪れた成翔祭受付の様子

今回のテーマは「環」。「学部、学科を超えさまざまな人がかかわって成翔祭を作り上げる」、さらに「医療現場で求められる人と人のつながり」の2つの意味を込めてテーマを設定した。当日は天候に恵まれ、昨年度の来場者3,800人を大きく上回る4,817人が来場。小泉一成成田市市長も来訪した。

特別企画として「スタンブラリー」や「BINGO大会」、日本航空の模擬店、日本航空スイングジャズクラブ「シルバークロウイングス」の音楽演奏、SPRING JAPANによるフライトシミュレーター体

験などを実施した。

各フロアでは、看護学科・理学療法学科合同のVRゴーグルを使った医療教育体験企画、医学科有志、部活動・サークルなどの団体がゲーム、体験、展示、演奏などさまざまな形で成翔祭を盛り上げた。屋外の模擬店には18店舗が軒を連ね、部活動・サークル、学生会、学科有志、学科教員などの団体が出展したほか、体育館と野外ステージでは演奏、歌、ダンスなどのパフォーマンスを披露した。(広報 城貴弘)



●オーケストラ部による演奏



●フライトシミュレーター体験

小田原キャンパス

第19回潮風祭

今年のテーマは「Evolution」。昨年度のテーマ「Revolution (革命)」から続いているという意味もあり「Evolution (進化)」という意味のように今までの内容から進化した潮風祭にして装飾や企画などを盛り上げた。

ステージでは1日目は軽音楽部のライブやボディビル大会、

歌うま大会、2日目はダンスや三味線演奏会、ゲーム大会を行い来場者の皆さんに楽しんでいただいた。また、両日開催で各学科の体験企画や部活動体験企画、熱海病院DMAT(災害派遣医療チーム)講演やBLS(一次救命措置)体験があり、国際医療福祉大学を多くの方に知ってもらう機会ができた。

潮風祭と同時開催の牧田浩行小田原保健医療学部学部長による特別講演会に際して、多くの地域住民の方にもお越しいただき、企画や模擬店、小田原キャンパスの学生との交流も楽しんでいただいた。(学務課学生係 柿澤啓輔)



●軽音楽部のライブ演奏



●学生団体の模擬店



●熱海病院スタッフによるBLS体験

大川キャンパス

第20回月華祭

今年のテーマは「Ver.0」。薬学科2年の津志田 凜さんを中心とした実行委員会が、会場レイアウトの決定、イントロクイズやe-スポーツ大会といったイベントの企画をし、テーマの通り、昨年とは一味違う、新たに生まれ変わった月華祭運営に尽力した。(学生係 石橋武彦)



●新企画のイントロクイズ



●講堂の特別ステージではライトの演出も



●1号館に10の屋台村とイトインコーナーを設置

東京赤坂キャンパス

第7回茜陵祭

「more active!!!」をテーマに大学祭「茜陵祭」を開催した。学生や教職員による音楽ライブ企画や大学院生による体験コーナー、飲食などの模擬店に加え、近隣の赤坂警察署からはピーポくんも来場し、警察犬のデモンストレーションが行われた。

大学祭と同日開催イベントとして、市民公開講座「発達障害のある親の子育て支援-養育には愛が必要だろうか-」や、今年度最後となるオープンキャンパスも行われた。オープンキャンパスでは心理・医療マネジメント学科の紹介、在学生インタビューなどを実施。キャンパスの各施設を案内する普段のキャンパスツアーとは異なり、この日は大学祭の企画も併せて案内した。オープンキャンパス終了後には大学祭の各企画で、参加者が在学生と触れ合う姿も見られた。(事務部 小野剛)



●使用済ペットボトルキャップやコンタクトケースを集める活動を行ったボランティアサークル



●人気者のピーポ君と警察犬



●学生インタビューが行われたオープンキャンパス

那須こどもの家で今年も体験乗馬会開催

8月21～22日に国際医療福祉大学大田原キャンパス内にある社会福祉法人邦友会児童心理治療施設那須こどもの家グラウンドにおいて、公益財団法人全国乗馬倶楽部振興協会と那須こどもの家の共催で体験乗馬会が開催された。

2日間にわたり午前の部では、関森英伸作業療法学科長をはじめ



●ヘルメットをかぶって順番を待つ子どもたち ●講義受講後に乗馬を体験する大学教員

め大学教員が18人、施設職員が11人、学生が16人、ホースセラピーの効果を実感することを目的として、講義を受講した後、実際に乗馬を体験した。

体験乗馬会午後の部では、那須こどもの家と隣の6つの児童養護施設の子どもたち71人が参加した。午前の部から参加していた大田原キャンパス、東京赤坂キャンパスの学生13人が乗馬下馬の際や落下防止等のサポートをするボランティアとして活躍した。馬と触れ合った子どもたちからは一様に笑顔がこぼれていた。子どもたちにとっても、学生ボランティアにとっても夏休みの貴重なひとときとなったようである。

(那須こどもの家 田中浩之)

廣岡 良隆 教授が国際高血圧学会にて受賞

廣岡良隆 教授(国際医療福祉大学大学院/国際医療福祉大学福岡保健医療学部/福岡山王病院循環器内科)が国際高血圧学会(International Society of Hypertension: ISH)にてISH Paul Korner Awardを受賞した。

この賞は、神経科学分野における高血圧に関する研究に顕著な貢献を示した人物を称える大変栄誉あるもの。廣岡先生は、脳の特定の循環器系中枢への遺伝子導入という画期的な技術を導入し、高血圧に関与する中枢神経機構の重要性を示した。また、交感神経系の活性化が、酸化ストレス、炎症、免疫変化の影響を受ける脳から起こることを明らかにし、この研究分野を世界に広げた。

廣岡先生は受賞にあたり「オーストラリアの医学生理学の巨匠 Paul Korner教授の名にちなんで作られたISH Paul Korner賞を受賞したことを大変名誉に思います。雲の上の存在だった Paul

Korner教授にはオーストラリア留学中に初めてお会いし、ISHでは議論する機会がありました。厳しい質問と温かい励ましをいただいたことを覚えています。皆さまに深く感謝します」とコメントした。

(医学検査学科長 佐藤謙一)



●表彰式で記念撮影に応じる廣岡教授(中)

地域公開講座開催

9月28日、大田原キャンパスで「地域公開講座」を開催した。本講座は、本学の基本理念の一つ「社会に開かれた大学」を実現するため、毎年2回、地域の方々を対象に行っており、今年度第1回



●公開講座の様子



●相談ブースの様子

は、大田原市制施行70周年記念事業である「健康セミナー」と共催で開催した。

「健康長寿はフレイル予防から一これからも自分らしくあるために」と題して、学科教員4名による講座のほか、学科教員や学生による健康相談ブースでの相談会等を実施。約300人の参加者の健康意識の向上に寄与した。

当日は、邦友会と大学共催の「オータムフェスタ」もあり、多くの人でにぎわった。今後もこのようなイベントを通じて、地域とのつながりの強化に取り組んでいきたい。

(総務課 深澤望)

成田こっぷくアカデミーを開催

成田キャンパスでは成田市の介護予防・生活支援サービスの一環として、成田市と連携した「成田こっぷくアカデミー(短期集中予防サービス)」を開始した。本プログラムは、住み慣れた地域で自立した生活を続けていけるよう、3か月ほどの短期間で集中的に生活機能の改善などを図るプログラムとなっており、成田保健医療学



●健康体操を行う参加者たち ●陶芸を通じて手先の機能維持を図る ●機織りを用いた創作活動

部理学療法学科、作業療法学科の教員が主体となり実施している。訪問型と通所型があり、通所型は成田キャンパスに來校していただき、運動や創作活動を行うプログラムとなっており、教員のほか、各学科の学生も補助で対応している。(広報 城貴弘)

塩谷病院で中高生向け作業療法見学・体験会

10月19日に大田原キャンパス作業療法学科と国際医療福祉大学塩谷病院作業療法室の共催企画として、「中高生向け病院の作業療法見学・体験会in国際医療福祉大学塩谷病院」が開催された。当日は、中学2年生から高校3年生まで県内外から11人が参加した。参加者は、片麻痺疑似体験セットを装着して、利き手でない手で調理や着替え、洗濯物干し等に挑戦した。自助具という生活を助ける道具を効果的に活用し、障害を持って「患者様がやりたいと思うことを諦めない」考え方を学んだ。

また、実際に塩谷病院に勤務する作業療法士が患者様にリハビリテーションしている場面を間近で見学することができ、参加者からは、「先生方が丁寧に教えてくださり、とても充実した時間になりました。仕事内容もよく分かり、改めて医療系の仕事に就きたいと

思った」、「オープンキャンパスやインターネットでは得られない経験をすることができ、とても勉強になった」等の意見が寄せられた。(作業療法学科 渡邊清美)



●自助具を使って料理体験 ●体験会の様子

小田原キャンパスで市民公開講座を開催

9月28日、小田原キャンパス本校舎にて、市民公開講座を開催した。

今回は、日本経済新聞社編集委員の大林尚氏をお迎えし、「『ポスト岸田』の政策を読む」をテーマにご講演をいただいた。

この日は、国民が注目した自民党総裁選開票日の翌日で、これま



●講演中の大林尚氏



●熱心に聞き入る参加者たち

で記者としてもさまざまな経験を積まれてこられた現役の編集委員の大林氏の講演は、同講座開催案内時から注目が集まり、大勢の市民の方々が参加した。

参加者からのアンケートでは、「タイムリーな内容でとても良かった」、「これまでのような医療関係のテーマではなかったが、とても興味深い内容だった」、「わかりやすかった」、「またの機会があれば参加したい」といった高評価のご意見をいただいている。

小田原キャンパスでは、今後も医療関係の講座をはじめ、さまざまな観点から市民のための公開講座を企画していく予定である。

(総務課 下村達典)

本学同窓会「マロニエ会」主催 30周年記念事業 ホームカミングデー 各キャンパスで開催

卒業生が母校のキャンパスに集い、在校生や教職員とキャンパスでのひとときを共有するホームカミングデー。来年度開学30周年を迎えるにあたり、本学においても同窓会「マロニエ会」主催によるホームカミングデーを実施した。各キャンパスとも、大学祭当日や翌日に行われた。

大田原キャンパス

国際医療福祉大学塩谷病院DMAT(災害派遣医療チーム)の一瀬雅典副院長、田代紘子看護師、土屋結有花作業療法士の3人を招き、F棟101大講堂において「すべては被災者のために!国際医療福祉大学塩谷病院DMAT」をテーマに、60分の特別講演会を開催。災害拠点病院とDMATの役割、能登半島地震被災地での活動などについて現場撮影のスライドや動画を用いて紹介した。土屋作業療法士からは、被災者も支援者も「これがあると元気になれる」という活力の元(お菓子、自分の好きな物事=「推し」など)を準備しておくことと災害時に自分の心を守れるというアドバイスがあり、聴講者は自身を振り返る機会になった。

学生団体「災害復興・対策チームあおぞら」の活動報告発表では、団体代表の末武麻依さん(放射線・情報科

学科2年)をはじめとする3人が活動実績を報告した。地震が起きた時の身の守り方を楽しみながら学べる「防災すごろく」の説明時には、前列で聴講していたDMAT隊員もうなずきながら発表に耳を傾けていた。

講演会終了後、DMAT隊員のご厚意による救急車内覧会とユニフォームの試着体験会を開催。救急車に乗る順番を待つ子どもやDMATのユニフォーム姿で記念撮影を行う学生たちで会場は大賑わいとなった。

同日午後には、7つの分科会(学科別同窓会)イベントを開催。卒後研修会、卒後情報交換会など、各分科会で趣向を凝らした企画が実施され、イベント後半には「茶話会」を楽しむ分科会も。大学の教室で仲間とおしゃべりを楽しみながら、学生時代を懐かしむ卒業生の様子が見られた。(マロニエ会 伊藤かおり)



●ユニフォーム試着会



●国際医療福祉大学塩谷病院DMATの3人



●子どもたちに人気だった救急車内覧会



●大講堂で行われた特別講演会

小田原キャンパス

「地域で活躍する卒業生の今」について看護学科・理学療法学科・作業療法学科の卒業生による講演会が行われ、多様なキャリアパスや実践的な活動内容について学ぶ機会となった。

講演会後は同日キャンパス内で開催されている潮風祭(大学祭)を自由に散策し、母校の“今”に触れていただ

いた。また、ケータリングサービスを利用して、3学科合同で学科を飛び越えた形での分科会も行われた。卒業生の皆さんは、同窓生や先輩、後輩、恩師と旧交を温めていただき、在学生には、卒業生との貴重な交流の機会となった1日だった。(学務課学生係 柿澤啓輔)



●ホームカミングデー参加者達



●講演会の様子



●交流会の様子

成田キャンパス

成田キャンパス理学療法学科1期生の阿部暁樹先生(福島県立医科大学医学部放射線健康管理学講座/放射線医学県民健康管理センター)にご登壇いただき「能登半島地震における被災地支援の在り方と課題」について講演会を行った。ご自身が東日本大震災を経験されており、その経験談を交えながら、能登半島地震被災者の皆さまに行った具体的な支援や今後の課題等についてお話しを伺うことができた。

午後には看護学科主催の講演会では、井上智子先生(国際医療福祉大学大学院教授/成田看護学部長)、小田原キャンパス3期生の吉田瑞香先生(キクシア株式会社保健師)が登壇し、看護職のキャリアプランをテーマとした講演会と交流会を行った。

同日成翔祭2日目にあたり爽やかな1日となった。(学生課 加藤ゆり子)



●段ボールピットの体験者へインタビュー



●Q&Aコーナー



●在学生参加者との集合写真

大川キャンパス

大学が一番華やぐ大学祭に併せ、「ホームカミングデー」企画として、同窓生対象のフォトコンテストを開催した。

2025年に開学30周年を迎えるにあたり、国際医療福祉大学の歴史を同窓生の思い出の一枚とともに振り返り、これからも母校を想っていただきたいという趣旨のもと、大川キャンパスの同窓生に学生時代の写真とコメン

トを送ってもらった。大学祭に来場した方へ気に入った写真に投票いただき、見事、MT1期生の方が最優秀賞に選ばれた。また、同日に現地(大川キャンパス)とTeamsでのハイブリット形式でPT分科会とMT分科会を開催した。総勢約60人の同窓生が参加し、同窓生の症例発表や懇親会が有意義な時間だったという声が寄せられた。(事務部学務課学生係 久良木愛未)



●同窓生から数多くの写真が集まった



●医学検査学科分科会



●理学療法学科分科会2024

14か国・地域で計751人が参加

真の国際人養成をめざす本学の基本理念を実現するため他大学にはない大規模で行われる海外研修講座「海外保健福祉事情」は2024年度夏季に、14か国・地域で25のグループに分かれて、本学から520人、姉妹校の福岡国際医療福祉大学から231人の計751人が参加。学生たちは、それぞれの国の医療・福祉事情を学んだ。今号ではこのうち、8グループの引率教員のレポートを紹介する。
(成田国際室 保田亮)



中国 中国リハビリテーション研究センター (CRRC)

大川キャンパスから5人、福岡国際医療福祉大学から9人の計14人が参加した。CRRCの10日間の研修は、多くの方々のおかげで、有意義に過ごすことができた。理学療法、作業療法、言語聴覚など日本にあるもの



●参加学生たち

に加え音楽療法、漢方リハビリテーション、児童リハビリテーション、脊髄損傷リハビリテーションなど珍しい診療科もあった。中国固有の漢方医療の実態も見学でき、漢方を身近に感じることができたようだ。また、リハビリには家族が積極的に参加し、ボールの手渡しなど動作のサポートを行うのを見て患者がより安心してリハビリできる環境があることを目の当たりにした。研修最終日の文化交流に向けて学生たちが意欲的に準備を進める姿に研修の成果を感じた。

大川キャンパス福岡保健医療学部理学療法学科 劉振助教
福岡国際医療福祉大学作業療法学科 木村まり子講師

英国 イーストアングリア大学 (UEA)

大川キャンパス、福岡国際医療福祉大学から各5人、大田原キャンパス3人の計13人の学生が参加した。助産師の業務について、英国では多くが水中出産で、ほとんどの分娩は医師の介入がなく助産師主導であること、英国の富裕層では自然分娩に抵抗があるため無痛分娩が多いなどの違いを知った。薬剤師業務についても、患者の症状と副作用を考慮して患者に最も適した処方箋を薬剤師が探すことなどの日英の違いがあった。また、認知症患者ができるだけ建物に閉じ込められている感覚を持たないよう、動物を連れてくるなどの配慮も新鮮だった。参加学生はマネキンを利用して全員が気管挿管の体験学習を行うなど充実した時間を過ごせたようだ。



●気管挿管実習の様子

大田原キャンパス保健医療学部放射線・情報科学科 嶺喜隆教授
福岡国際医療福祉大学看護学部看護学科 田中陽子助教

カンボジア カンボジア国立健康科学大学ほか

成田キャンパス3人、大川キャンパス5人、福岡国際医療福祉大学7人の計15人が参加した。首都プノンペンではカンボジア国立健康科学大学をはじめ、国立母子保健センター、クメールソビエト友好病院、シエムリアップではアンコール小児病院、県立病院など数多くの医療機関を訪問して研修を行い、ポル・ポト時代の悲惨な時代を経て復興しつつあるカンボジアの実態を垣間見ることができた。貧富の差、医療従事者の不足、不十分な医療技術と医療従事者の育成、都市部と郊外の医療格差など途上国のさまざまな問題を知るだけでなく、現地の学生、教職員と折り紙、紙飛行機作りなどを通して交流を深めることもできた。今後もSNSなどを通じて交流を続けてほしい。



●プノンペンの寺院ワット・フノンで記念撮影

成田キャンパス成田総合教育センター 登道孝浩助教
福岡国際医療福祉大学看護学部看護学科 村上祥子助教

ベトナム ハノイ医科大学ほか

大田原キャンパス2人、成田キャンパス5人、大川キャンパス9人、福岡国際医療福祉大学9人の計25人が参加した。ハノイ医科大学病院とバックマイ病院で研修を受けた。ハノイ医科大学では、伝統医学として鍼治療を行っていた。鍼灸師の資格が医師免許と別にある日本と違い、ベトナムでは医師の業務に包括されている。いずれの病院も院内に薬局があるが、薬剤師の数が少なく、混雑している。また、どちらも平日は一般診療時間が夜9時までで医療スタッフは休憩時間も少なく過酷な勤務だと聞いた。学生たちがハノイについて事前によく調べていたおかげで、現地では臆することなく行動しており、キャンパス間、学科間での親交だけでなく国際交流も積極的に行っていた。観光のスケジュールもあり、ベトナムの文化、自然に触れることができた。



●バックマイ病院での研修

大田原キャンパス薬学部薬学科 大越絵実加教授
大川キャンパス福岡薬学部薬学科 貝塚拓講師

インドネシア ウダヤナ大学

成田キャンパス9人、大川キャンパス10人、福岡国際医療福祉大学6人の計25人がバリ島にあるウダヤナ大学で組織されている夏季医療スクール (UIMS-S) に参加した。学生たちは出国前からUIMSSの学生メンバーとメールのやり取りを通じて準備した。インドネシア独自の薬草療法、写真や彫刻の作成をグループで行うことで達成感が得られるアート・セラピーなどの講義を受け、薬草づくりの体験や孤児院訪問などのワークショップを行った。同国では特異なヒンズー教徒が多数というバリ島独特の文化、世界的観光地らしく観光医学のプログラムを経験できて貴重な思い出になったようだ。ウダヤナ大学の学生たちと活発にコミュニケーションをとって、親睦も深められたと思う。



●エコー機を見学

成田キャンパス成田保健医療学部理学療法学科 石田武希助教
福岡国際医療福祉大学診療放射線学科 加藤明子講師

韓国 建陽 (コニャン) 大学校

大田原キャンパス2人、成田キャンパス36人、大川キャンパス36人、福岡国際医療福祉大学23人、計97人での研修となったため、引率教員も5人となった。韓国中西部に位置する大田 (デジョン) 市にある建陽大学病院は2000年に開院した臨床病理自動化システム、処方算化プログラムを中部圏では最初に導入した総合病院。IT化が進んでおり、病院受付がスマートフォンでできる。患者の誤認を防ぎ、スタッフの軽減につながり、患者との接触機会が減り感染予防になり、患者のプライバシーの保護も可能。二重瞼の整形施術を専門的に受けることができる施設が大学病院内にある。驚きの連続だった。学生との交流を通して視野を広げることができた研修だった。



●総勢97人が参加した建陽大学への研修

大田原キャンパス総合教育センター 福井讓准教授
大田原キャンパス保健医療学部言語聴覚学科 大金さや香准教授
成田キャンパス成田看護学部看護学科 稲岡希実子准教授
大川キャンパス福岡保健医療学部理学療法学科 永井良治准教授
福岡国際医療福祉大学作業療法学科 多賀誠准教授

ベトナム チョーライ病院

大川キャンパスの11人が参加した。南部ホーチミン市にあるチョーライ病院はベッド数1800床を数える巨大病院で、外来患者は一日5000人を超え、朝から診察受付のために行列ができています。病院の廊下に横たわって待ち時間を過ごす患者・家族も多い。近年の経済発展で都市化や生活環境の変化が進み、人の移動が活発になったことで、麻疹や Dengue 熱の流行がたびたび発生しているという。また、排ガスの影響が副鼻腔炎患者が多く、その影響で脳梗塞患者も増えている実態を現場で知ることができたほか、実際にリハビリ治療に参加した作業療法学科の学生が用意したけん玉を患者さんのリハビリに取り入れてもらうこともでき、貴重な経験ができた様子だった。



●チョーライ病院での実習

大川キャンパス福岡薬学部薬学科 吉武康之准教授

台湾 元培医事科技大学ほか

大川キャンパス、福岡国際医療福祉大学ともに28人、計56人が参加した。研修で訪問したどの病院でも最先端のAIが取り入れられている。入院患者のベッドの上には手術日やその内容などがタブレットのような液晶画面に掲示しており、血圧などのデータ入力も自動で行われ記録される。薬の情報も表示されるので、投薬ミスが防げる。日本と同様、超高齢化社会で医療従事者の不足が課題になっている。これを解消するため医療ネットというシステムがあり、医療従事者の把握、人材育成が行われているという。台湾の親日、親切という国民性にも助けられ、学生たちも積極的に研修に参加していた。



●トモダチ・アワーでの現地学生との交流

大川キャンパス福岡保健医療学部医学検査学科 澁田樹准教授
福岡国際医療福祉大学理学療法学科 谷口隆憲講師
福岡国際医療福祉大学言語聴覚学科 豊嶋明子助教

国際医療福祉大学成田病院

成田市「健康・福祉まつり」への参加

10月19日、成田市が市制施行70周年を記念して5年ぶりの「健康・福祉まつり」を開催、成田赤十字病院や成田市の福祉施設など各団体が参加するなか、当院からは糖尿病・代謝・内分泌内科の山賀政弥医師をはじめとする糖尿病チームが、「血糖値が気になるあなたへ！糖尿病の基礎知識」「秋へ向けて日常生活の見直し」「毎日の運動でめざせ！糖尿病予防！！～POPランも夢じゃない～」などさまざまな講演を行った。

院外に出向いての出張講演会は初めての取り組みであり、約100人の方々に興味深く講演に耳を傾けていたのが印象的だった。今後も地域とコミュニケーションを図りながら、こうしたイベントに積極的に参加していきたい。



●健康・福祉まつりで出張講演を行った糖尿病チーム

骨粗鬆症リエゾンサービス (Osteoporosis Liaison Service : OLS) の市民公開講座を開催

10月26日、OLSチームの市民公開講座を開催した。整形外科・中山政憲医師をはじめ、看護師、臨床放射線技師、作業療法士、管理栄養士、薬剤師や医事課のスタッフが「真剣に考えたい骨のこと～多職種で取り組む骨粗しょう症」というテーマで講演を行った。参加者たちは配布資料へ熱心にメモを取りながら聴き入っており、終了後には質問が相次ぐとともにアンケートでも「骨粗鬆症は病気で、一度骨折するとくせになるということを改めて考えたいと思った」「いろいろなお話を聞けてとても参考になった。参加してよかった」「リエゾンサービスを受けたいと思った」などのお声をいただいた。

今回は12月14日13時30分から、循環器内科・杉村宏一郎教授と多職種による「心不全にチームで挑む」を開催予定。
(総務広報課 畠山実大)



●OLSチームと質疑応答に答える中山医師

国際医療福祉大学病院

那須塩原市長を迎え、地域連携実習を実施

9月19日、渡辺美知太郎那須塩原市長を迎え、本学の医学部臨床実習の1つである地域医療実習が行われた。

学生は、事前に提示された4つの課題で班ごとにレポートを作成し、模造紙1枚にまとめて発表。その課題は、地域医療の「少子高齢化、多死時代」「医療DXやAIの導入」「将来予測と対策」「外国人労働者の協力」で、まさに今の時代を反映したものだ。渡辺市長は発表を細かくメモしながら熱心にお聞きになり、発表終了後には「行政が成すべき今後の地域医療のあり方の参考とさせていただく」などと意見を述べられた。

最後の質疑応答は学生と渡辺市長との活発なやり取りが続き、終了間際まで盛り上がった。学生からは、「地域医療への興味を持つ大きなきっかけとなった」などの感想があり、渡辺市長からも「とても有意義な時間だった」と喜びの声をいただいた。

(総務課 中野雄斗)



●実習を終え、渡辺市長を囲んでの記念写真

国際医療福祉大学三田病院

池田佳史病院長による甲状腺腫瘍専門外来を開始

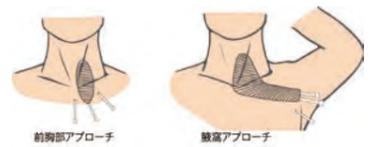
4月に着任した池田佳史病院長(国際医療福祉大学医学部教授)は、消化器疾患の手術のほか、甲状腺内視鏡手術も専門としている。1999年、世界に初めて腋窩(わきの下)アプローチ法による内視鏡下甲状腺切除術を考案・実施し、以来25年間、この手術に携わってきた。

当初は、首という空間がない場所で甲状腺を取るといふ手術のむずかしさで苦労することもあったが、現在は甲状腺半切除のみならず、甲状腺全摘や甲状腺がん手術を問題なく行えるようになっていく。内視鏡手術のメリットとして、嚥下時の違和感や術後の疼痛が軽減するほか、首に傷が残らないということが挙げられ、高い評価を得ている。

池田病院長は、11月19日の医療連携協議会にて講演を行うほか、12月21日には、甲状腺内視鏡手術に関する健康セミナーを当院にて開催予定である。参加申し込みは三田病院総務課まで。(総務課 山本悦子)



●池田佳史病院長



●健康セミナー情報→



国際医療福祉大学熱海病院

「救急の日イベント2024」を開催

9月10日、熱海市消防本部との共催により「救急の日イベント2024」を開催した。内容は2部構成で、1部は救急医療講演会、2部は応急手当講習を実施した。一般の方や学生など約30人が参加し、1部の救急医療講演会では当院救急科の遠藤拓郎医師が「救急医療について」をテーマに、熱海市の救急の実態や心肺停止時の胸骨圧迫を正しく行う一連の手順などについて説明した。2部の応急手当講習では、熱海消防署の中村友紀指導救命士が、一次救命処置の手順、胸部圧迫およびAEDの使用手順について説明した。参加者たちは、AEDのトレーニングキットを使って胸部圧迫に臨んだ。

今回の講座によって、救急医療および救急業務に対する正しい理解と認識を深めることができたことと実感している。

(総務課 鈴木佳寿真)



●講演を行う遠藤医師

国際医療福祉大学塩谷病院

川井悠喜理学療法士が「OLS活動奨励賞」を受賞

10月11日に「第26回日本骨粗鬆学会」が開催され、当院リハビリテーション室の川井悠喜理学療法士が「2024年度OLS活動奨励賞(OLS:骨粗鬆症リエゾンサービス)」を受賞した。OLS活動奨励賞は、二次骨折予防に取り組んでいる骨粗鬆症マネージャー等を対象に、すぐれた成果のあった活動を奨励することを目的としている。公募のもと、日本骨粗鬆学会の審査により、今年も3人以内の選出という狭き門を突破しての受賞であった。

川井理学療法士は、「FLS、OLSには多くの専門スタッフが連携して取り組んでおり、今回の表彰は当院FLS(骨折リエゾンサービス)チーム全体の活動に対するものだと考えている。チーム立ち上げ当初から指導して下さった整形外科の菊池先生をはじめ、メンバーの皆様には心から感謝申し上げたい。高齢化が著しく進展するなか、骨折予防の重要性はますます高まっており、地域の皆様の健康とQOL維持改善のため、これからもFLS活動をがんばっていききたいと思う」との抱負を語った。(総務・人事課 後藤文栄)



●賞状を手にする川井理学療法士と菊池駿介医師 ●FLSチームでの受賞時集合写真

国際医療福祉大学市川病院

第100回を迎えたけんこう教室

2007年に始まった当院けんこう教室は、9月21日に第100回開催を迎えた。節目の回にふさわしく、大谷俊郎病院長が講師を務め、「今日から始めるひざと腰の痛み対策」と題して、膝痛・腰痛のメカニズムを解説、さらには自身考案の高齢者向け予防トレーニングも自ら実演し、参加者から好評を得た。今回は定員を上回る多数の申し込みで、会場は熱心に聴講する参加者でいっぱいとなり、第100回記念を飾る盛況ぶりであった。

当院のけんこう教室は、100回に至るまで病院知名度の向上に大きな役割を果たしてきた。院内開催に加え、出張開催を7年ぶりに再開することとした。その第1弾として、9月25日に市川市大洲自治会館にて、腎泌尿器外科の川川剛人医師による尿のトラブルについての出張けんこう教室を開催した。規模は小さいながら参加者の関心の高さが感じられ、今後も知名度向上のためにも継続していきたいと考えている。

(総務人事課 高田聡)



●第100回けんこう教室の様子 ●大洲自治会館での出張けんこう教室

山王メディカルセンター/山王病院

山王メディカルセンターに針谷正祥院長が就任

山王メディカルセンターでは11月1日、前院長の山中寿医師が、東京女子医科大学の理事長および学長に選任されたことに伴い、新院長に前東京女子医科大学医学部膠原病リウマチ内科学分野の教授・基幹分野長で、一般社団法人日本リウマチ学会 特命副理事長の針谷正祥医師が就任した。



●山王メディカルセンター 針谷正祥院長

10月28日、山王病院に婦人科腫瘍治療・婦人科副部長として着任した鈴木二郎医師を講師とし、婦人科腫瘍をテーマとした健康講座「婦人科腫瘍について 基礎知識と治療法を学ぼう」を開催した。鈴木医師は、婦人科腫瘍治療の豊富な経験を持ち、低侵襲手術(腹腔鏡手術・ロボット支援手術)にも積極的に取り組んでいる。



●手術支援ロボット ダビンチX

山王病院では10月より、これまでの「ダビンチSi」に代わる手術支援ロボット「ダビンチX」を導入した。今後は、保険診療の適応となっている子宮筋腫や腺筋症などの婦人科良性疾病に対する子宮全摘術、早期子宮体がんに対する子宮悪性腫瘍手術、子宮脱を含む骨盤臓器脱に対する仙骨腔固定術を積極的に実施していく。

(山王病院総務課)

各キャンパスの学生たちが思い思いに活躍するクラブ・サークルをご紹介します。

成田キャンパス編

オーケストラ部



初めての大ホールでの演奏となった2024年の成田市敬老会



2023年公津の杜フェスタ、楽屋内にて



新入生も交えた2024年のウェルカムパーティでの演奏

サークルから部活へ

2023年、オーケストラ部をサークルとして立ち上げ、今年から部活に昇格しました。東邦大学付属東邦中学校吹奏楽部とオーケストラ部を立ち上げた初代指揮者である内藤紀之先生を指揮者としてお迎えし、ご指導いただいています。成田キャンパスの医学科、看護学科をはじめとするさまざまな学科の学生が所属しており、関東や関西、九州だけでなく、海外出身の部員も在籍しています。

昨年より増えた演奏の機会

現在、オーケストラ部には、約40人が所属しており、楽器はバイオリンが25人と最多、そのほかにピオラ、チェロ、コントラバス、フルート、クラリネットなどの楽器が参加しています。昨年度の演奏会では人数が10人を切ることもありましたが、今年4月には1年生が20人ほど入部し、臨床実習から戻ってきた医学科5年生の先輩方も加わり、昨年の倍以上の人数で演奏会を行うことができるようになりました。昨年は成翔祭(大学祭)や謝恩会など、学内での演奏が多かったのですが、今年は、成田市の敬老会や国際医療福祉大学成田病院での海外からの来賓に向けた演奏、日本臨床細胞学会の懇親会での演奏など、学外からの

依頼が増え、大きなホールで演奏させていただくことができました。

部員には、オーケストラ経験者も多いですが、大学から楽器を始めた初心者も演奏会に参加しています。また、演奏曲は部員から演奏したい曲を募集し、その中から選んだクラシック音楽やジブリの曲などのポップスを演奏しています。今年入部してくれた新入部員のおかげで、楽器の種類も増え、よりオーケストラらしく成長しています。オーケストラ部は立ち上げから2年で、足りない楽器もあり、まだまだ成長途中ですが、みんなで意見を出し合いながら曲を作り上げていくことや、多くのお客様の前で演奏するという経験は、かけがえのない思い出になると思います。

オーケストラに興味のある方、音楽経験者はもちろん、これから何か楽器を始めてみたいと考えている人も大歓迎です！入部をお待ちしています！

オーケストラ部 部長
医学部医学科 3年 小野寺彩乃

